

平成24年度 多文化共生シンポジウム



知ることから始まる

外国につながる、地域の子どもたち

～子どもたちの未来を、ともに描こう～

報告書

日時：平成24年7月27日(金) 14時～16時

場所：つづきMYプラザ多目的室1・2

つづきMYプラザ
(都筑多文化・青少年交流プラザ)

* この実施記録は、シンポジウム当日の録音を基に作成いたしました。

●はじめに

(つづき MY プラザ館長 林田育美)

本日は、ご参加いただきありがとうございます。私は、つづき MY プラザ館長の林田でございます。

今回のシンポジウムは、つづき MY プラザの初めての試みでございます。

都筑区は外国籍住民登録が 2,700 人弱で、横浜市の中では決して多い方ではありません。しかし彼らが散在しているという実態を考えると、大人であれ子どもであれ、外国籍住民が孤立しないようにと願いながら対応する日々です。ボランティアとして関わる人たちだけではなく、関心を寄せてくださる人を一人でも多く増やすためには、地域の中で「知ってもらうこと」から始めなければなりません。そして本当の課題を知らないままにしないことが、外国につながる子どもたちの未来を描くことにつながると考え、本日のシンポジウム開催に至りました。

子どもたちが日本語会話を覚えると、却ってその子がかかえる困難が見えにくくなります。それでは私たちは、どうやってそれを感じ取り、どうやって知るのでしょうか。それを知るためには、まずは外国にルーツを持つ人のことを知る必要があります。母国ではない日本で、彼らがどんなことを感じどうやって困難を乗り越えていくのか。どうやって二つの文化を融合していくのか、その声に耳を傾ける必要があります。

本日パネリストをお願いした方々は、今回の主旨を受けとめてくださり、準備を重ねてくださいました。その声は今日お越しくくださった皆様に、必ず届くに違いない、そしてともに考えるきっかけになるに違いないと確信しております。

暑い中お越しくくださった皆様、この狭い会場で大変申し訳ないと思っておりますが、良い2時間になることを切に願っております。最後まで、どうぞよろしく願いいたします。

ありがとうございました。



●基調講演

『外国にルーツを持つ子どもたちが孤立しないために』

講師：祖慶メルセデスさん（アルゼンチン出身 鶴見区在住）

【司会】

それでは、第一部「外国にルーツを持つ子どもたちが孤立しないために」と題して、祖慶メルセデスさんにお話をいただきます。

まず、祖慶さんのプロフィールをご紹介します。祖慶さんはボリビアで生まれ、3歳からアルゼンチンのブエノスアイレスで育ち、1991年に来日されました。それから21年。現在高校一年、中学二年の男の子、年長の女の子という三人のお子様を持ち、お仕事をしながら忙しい毎日を送っておられます。家族は沖縄からボリビアへの移民で、ご両親とも日本国籍ですが、育ったアルゼンチンが祖慶さんのふるさとです。二つの文化を持って生き、今の自分が“なに人”なのか模索し続けておられます。

祖慶さんは、話したいことがたくさんあるということで、いろいろなところに話が行ってしまうと話したいことが伝わらないといけないとおっしゃり、こちらの質問にお答えいただく形で進めさせて頂くことになりました。今日のために何度も原稿を練って、考えてくださいました。それでは始めさせていただきます。

※祖慶さん自身のことばをできるだけそのまま掲載しました。

1. アルゼンチンから、初めて来日したときに感じた文化の違いは何ですか？

やはり一番感じたことは言葉です。私の親はスペイン語が話せない。それで私は日本に来る前から、日本語は家でしゃべっていました。でも、字は覚えられませんでした。日本語学校はあったけれどあまり近くに近く、家でしゃべる日本語程度のものしか知らなかったです。

日本に来て、それでなくてもほとんど意味が取れなくて、一番苦労したのは、カタカナ言葉が多くて、私にとってそのカタカナ言葉は外国語を日本人が日本発音でしゃべっているみたいな感じで、とても複雑でした。自分の親は日本人なのに日本にいながら日本語がしゃべれない。

たとえば“エプロン”は“まえかけ”と私は覚ええました。今の人に聞くとババくさい、ジジくさいと言われますが、私の中ではそれが日本語です。

もっと日本語を大事にしてほしいという気持ちがあつて、日本に来てショックだった。カタカナ言葉がすごく多くて、ちょっと意味がわからないことも多かったです。

その他に、文化の違いで困ったのは、日本人の社交辞令。「今度、お茶しましょうね。」「うちに遊びに来て。」とよく言われたんですけど、実際、お茶も飲んだことはない。家にも行ったことない。呼んでも来てくれない。ちょっと難しかったです。ずっとそこは、理解できなかつたです。広く浅く付き合うというのが印象的でした。それで、あまり友達ができなかつたですね。

子どもが生まれて、同じ年ごろの子どもが近くで遊んでいたのも、お母さんに声かけたんです。「同じマンションに住んでますよね。」そしたら次に会ったときに「町内会で読み聞かせの会があります。」というチラシをもらったんです。でも

私は、町内会すらどこにあるか知らない。何なのかも知らなかったから行かなかったんです。なので、友達になれなかった。すみません……。

2. 保育園で一番困ったこと、うれしかったことはなんですか。子どもが困ったこと、お母様が困ったことなどを教えてください。

子どもが生まれた時も、病院ではすべて理解できなかった。出産も初めてで、自分の国であつてもたぶんわからないことだらけだったと思います。日本では、何に気をつければいいのか、はっきり言われなくて困りました。でも、私の周りには、外国人ママたちがいっぱいいます。スペイン語でしゃべれる友達もいます。その当時、アルゼンチンからスペイン語で書かれた出産の本を送っていただきましたけど、誰かに聞くのが一番良かったです。

むこうでは、例えば出産するときは、帝王切開にするか、自然分娩にするかを聞かれます。そういうところもやっぱり違うし、初めての出産は誰でも不安だと思います。でも私と同じように外国で暮らした方々が近くにいる、壁がほぼ同じでした。みんなも病院に行って何を言われてもそれは理解できなかった。私が聞かなくても「こういうことがあったんだよ。」と教えてもらったのが、



祖慶メルセデスさん

壁はあったけど、私にとっては壁の前に踏み台（友だちの助け）があった気がします。でも、みんながみんな、そういう方達かって言えば、そうではない。やっぱり、人とあまりしゃべる機会がないとか、そういう方々と出会いがないと壁は壁のまま。そういう時は、人間は誰かに気持ちを分かち合ってもらえるだけで、すごい助かります。

あとは、子どもが幼稚園に行ったとき、その幼稚園の園長先生が外国で暮らしたことがあって、手紙には全部ルビを振ってくれてたんです。私は日本語ができていたし、でもその手紙は読んでも読んでも意味がわからない手紙がほとんど。言葉を一つ一つ探してまでやっていると終わりが無い。どこが大事なポイントかわからない。だいたい学校とか幼稚園の手紙は“暖かくなりました……”とかあいさつから入っていく。私もそれはわかっている。“子どもの体調に気をつけましょう。”“そうね”みたいな。でも何が言いたいのか全然つかめない。最初からそこが入るからイライラしてきて、「この手紙はどういう意味？何の手紙？何のお知らせ？」というのが先に。

読んでみると、例えば幼稚園では避難訓練が何日にありますって。そしたら私、「そう避難訓練、そういうのをやるんだ。」と思った。知らせてるってことは迎えに行くんだ（と思い）、何時にやるか聞いてみようとか、あれこれ考えて、先生に聞いたら、「午前中にやるんだけど。」「じゃあ、11時に私、迎えに来るんですか？」って聞いたら、「え？そんなことないよ。ただ、避難訓練があります。」そしたらそこで聞いてた他の子どものお母さんが、「あのね、その日はハンカチ持たせるのを忘れないようにすればいいのよ。」自分の中で「なんだ、それか。」と思ったんですね。それで「なんでハンカチ？」って思ったの。そしたら煙が出てるって設定でやるから（と言われました）。本当にそこまで言われないと、ただ逃げるんだ、みたいな感覚で避難訓練のイメージがあつて、ハンカチを口に当てて、それで腰を低くして

出ていくというのは全然なくて。ホントにそのお母さんにそれ言われて、「なるほど。」それから、避難訓練のお知らせ来たら、持ち物を忘れないように注意しないと、そうじゃないと訓練ができない。自分の手を口の前に当てて出ていくのは、ちょっとかわいそうかな。でもそのお母さんが言ってくれなかったら、うちの子はほとんどハンカチを持って行ってなかったんで、どうやっていたかわかりません。

日本人にとって当たり前のことも、私たちににとっては本当に初めて。まるっきりわからないと思った方が助かります。あと運動会があった時も「お弁当を持っていくんだよ。」とか、「じゃあ、どうやって持っていくの？一人に一個？」幼稚園の時は、グループによって違うんですね。やっぱり学年が高くなっていくと、子どもは子ども同士で食べたいとか。でも、それは自分たちではわからなくて。そしてその周りの日本人のお母さんたちに、「その日はお母さんは、お弁当作るのが大変だから、お父さんにちょっと早目にシートで場所取りをさせるんだよ。」って言われて、「何の場所？どうして場所をとるの？何をしますか？」みたいな。「自分たちは走らないでしょ？」と思って。でもそういうことまで言ってた人がいて、その時私は「えっ、ほんと？」で、家に帰って旦那さんに「こう言われたんですけど。早めに行つてと言われたんですけど。」「何時？」「わからない。」それでまた、その人に電話して、「何時に行くんですか？」みたいな感じで。でもその人がいたからうまくいくようになったんですけど、やっぱり、自分一人ではできなかったんですね。

3. 小学校に入って初めて経験したことは何ですか。子ども自身が経験したこと、お母さんが経験したことなどを教えてください。

やっぱり、小学校も知らないことだらけです。使う道具もどこで買うのか知らなくて、手紙が来

ても物によっては学校に申し込んで買えるものもあるけど、決まった日に行かないと買えないものもあるしもう本当に大変でした。でも、そういうのは、親が大変だけでまだいいんです。それを購入できるようになればね。日にちをちゃんと理解して、その日買えなかったらどうしようって。自分の知り合いの中では、その日仕事で行けないとかいろいろあって、そういう時はどうしようって。学校に相談すればいいことだけど、日本語がしゃべれないとか、そうなってくると、友だちを頼ってしまう。自分たちもよくわからない。

子どもがたぶん一番困ったのは、授業の中で、例えば体育では夏になると水泳ありますよね。水泳が始まる一年生の時に水泳カードを家に持ってきて、「ここを書かないといけない。」と言われていた。「おうちの人と相談して書いてください。」そうしたら、目標があるんですね。私は「目標？わかった。じゃあ、泳げるようになりたいって書けばいいんじゃないの？」子どもはそうのように書きました。でもやっぱり駄目ですよ。顔つけられない子は、顔をつけられるようにとか、50メートル背泳ぎとか、具体的に書かないといけないものを、私は日本語がそこまでできないから、なにがなんだかわからなくて、自分の子は顔をつけられるかどうかともわからない。そしたら「なんで先生が学校で決めないの？」と思ったりしたんですけど、まあ、たぶんその先生は、家の人が一番よく知っているんだと思ったんだと思うのね。

水泳もそうです。鉄棒も。いろんな目標決めなきゃいけないのは、うちの子はできていなかったと思う。私とそのサポートできなかったから。でも学校へ行くと、たぶんこの子は授業をちゃんと受けられていないとみられているんですけど、家でサポートがないからそうなるんですね。で、そこで先生が気がついてくれればよかったんですけど、うちはわからないから聞くこともできないの。自分が何をわかってないのかわからなかったから。だから、何かこう手伝うとかそういう思いが

あるのなら、聞かれるのを待つのではなく、ちょっと見て、どういうことに困っているのか繰り返して見て欲しい。

連絡帳も外国では欠席するときは連絡しないといけないんですね。病気の場合は、病気の診断書も必要。私は、連絡帳は、欠席するときのためのノートだと思ってました。でも子どもが一年生になって秋ごろにあるお母さんに、「ねえ、あなたの子、連絡帳書いてる？」って言われて、「書いてるって、子どもが？」って言ったの。そしたら「うちの子全然書いてこないからもうどうしようか。」ホント、困ってました。私は「子どもが連絡帳？」「毎日、見るでしょ？」って言われて、見たことない。で、家に帰って見てみたら、ホント書いてないんです、何も。しかもプリントがいっぱいあって、これ宿題だろうと思って、個人面談の時に持って行って、「うちの子、連絡帳、書いてません。」って言ったら、「あー、そうですね。でも心配ありません。」で、「宿題出してませんよね。」って言ったら、先生から「大丈夫。大丈夫。」と言われました。でも先生がチェックしてみると、「そうだ、最近は出してないですね。」でも、「どうしてそういう時は言ってくれないんですか？」と思ったの。

自分が育ったところでは、学校でやる内容をこなしていかないと留年してしまいます。だから、子どもが順調にいったないとすぐに親が呼ばれて、あなたの子はこういうところ困ってる、こういうことやってくれない、こういうことできないとハッキリ言われるんです、小学校一年生から。で、留年しないのはわかっているけど、日本はもっと厳しいと思ってました。入ってみるとそうではなかった。

2、3年生になると日本人の方にもこう言われた。「宝くじみたいなものです。先生が良ければその年はいいいんだ。」でも、子どもは1回しか1年生やらない。1回しか2年生やらない。で、それで重なって成長するんだよって思って、ホント、

悔しかった。でも、実際見てみると、よかった年のその先生によっては、ホント、子どもはすごく伸びていくし、そのままだったり、ちょっとマイナスになって遊びばかりとか。そういうこともありました。

とつても苦労したのは、音読カードです。家で音読聞いてあげても、言葉の意味がわからない。で、それが気になって、もう、聞いてないの。何を言ってるかわからないから。自分がスペイン語、話したりすると、スペイン語も日本語もアクセントがおかしくなる。外国人と話すときあなたのスペイン語ちょっと変と言われる。でも、日本人と話しても、ちょっと変わってるね。でも、どうしようもないんですね。点や丸に気をつけて読んでますかって評価する欄がある、その音読カードに。私、知らなくて。でも、子どもが途中で「お母さん聞いてない。」って言うの。もうホント「私も聞かなくちゃいけないの？」昨日も読んでる。もう2週間も同じこと言っても、私、意味わからない。聞いてるだけだったらいいいけど、評価する欄があるから。「何？○つけるの？」私としては、「ホントに○つけるの？これで？」という思いが強かった。自分が日本語ちゃんとしゃべれてないのに、日本語の文章読んでる子どもに評価できるのかって思っていました。

学校への不満はいっぱいありますけど、やっぱり、子どものためになっているかを考えて、先生が宿題を出すなら先生が回収して、ちゃんと出しているか出してないかを一人一人見てくれないと、何のために宿題出してくれたのか、やりたい子はやって、やらない子はまあしょうがないかな、みたいな、そういう感じが見えて、ホントにいやでした。

うちの一番上の子が一年生に入った時のクラスは、とても大変でした。歩いている子とか、授業中走って、物を振り回したり。私にとっては、それが、日本の学校でした。もう、ほんとにこれが

日本の学校？そういう印象でした。一年たっても、二年たっても、どのクラスにもそういう子が2人か3人いるので、授業がちゃんとスムーズにいかない。一人が飛び出して、先生がその子を追いかけて。どうしてそこまでして、その飛び出ていく子とかが、その教室にいるのかわかりませんでした。自分が育った環境だったら、区役所か市役所に回して、その家にだれか行かして見るのね。

それをずっと思ってたんですけど、子どもが、3年か4年になったところに校長先生がかかわって、その校長先生は、校長室のドアをあけっぱなしにして、よく子どもたちと話したり、遊んだりしていました。で、お話をするきっかけがいつもあって。そしたら「今度、ゆっくり話しましょう。いつでもいいから、どうぞ。」と言われて。たぶん日本人の社交辞令だったと思うけど、私は当時まだ、結構“ガイジン”だったんで、電話して「いついついいですか？」って聞きました。その校長先生といろいろ話していくうちに、アルゼンチンではこうだったとか、自分が話すことができました。すごく、先生も聞いてくれて、「それはわかるけど、日本の学校は法律でこう決まっていますので家庭には入れない。」とかいろいろ説明してくれて、やっとちょっと、自分が落ち着いたというか、納得まではいかないけど、受け入れられるようになりました。でもそれがなかったら、ずっと不満で、不満で、今までそうだったかもしれない。

その時までは、自分だけがおかしいんだと思っていました。でもやっぱり、その学年は落ち着き

がないと言われた。でも、次の学年もそうでした。最初の参観日で学校行くときに、私毎年、自分の子を見て、その後一年生を見に行く。6年間やりました。なぜかという、その参観日から、騒がしかったの、自分の子のクラスは。その年、自分の子のクラスに行き、その次の年も同じ状況でした。その翌年は2番目の子が入学して、みんな、座ってるの。私はその時、「この子たち、元気ない。」と思った。2年も連続で見てきたので、見てみるとちょっと違う。この子たち、みんな、おとなしいと思って。

4. 地域とのかかわりの中で感じたことは何ですか？町内会についてはいかがでしょうか。

今でも町内会のことはわかりません。何もわからないです。いろんな行事やっているのは見えます。祭りとかゴミ拾いとかがいろいろ見えるんですけど、子どもは小学校の時に近くの公園のゴミ拾いしかやってない。祭りとかなんか、いろいろあるけど、バスツアーとか。あと、防災訓練とか。ホントわからないです。

祭りのときは回覧板が回ってくるけど、回って回すだけ。一番気になったのが、役員した人たちが、町内会は大変だ大変だ、役員しているから今年最悪だ、とかって言うことがすごい印象的で、外国から来た人でも、それ聞くと、あまり近寄りたくない。近くいくと捕まっちゃうみたい。役員やろうみたい。やった人で日本語がちゃんと



しゃべれないとホント大変で、あっちこっち回ったりするんだけど、自分でも何していいかわからない。ただついていだけ。顔だけ、一人いました、みたいな感じ。そしたら、あんまり意味なかったけど、疲れただけで、意味わからなかった。「役員やれば、しくみがわかるよ。」と言われて「じゃあもう一回役員やってと言われたらやる？」と聞いたら、「絶対やらない。」と言ってた。みんなそう言います。役割があると思うんですけど、イベントっていうかそのものを見直すことも必要なと思います。日本の方も、ああいう感じで大変大変と言ってますので、そんな大変なら「どうしてやるの？」ってすごい疑問に思いました。

5. 来日した頃と今の自分、どのようなことが変わりましたか？

やっぱりすごい変わるんですね。私が来たときは、いろんなことに反発して、カタカナ言葉もそうでしたし。そうですね、私は親が移民で、来た時にはまだ国籍を選ぶことが出来たので、私は日本人です。でもだれかに聞かれたら、その当時は言えなかった。やっぱり私、日本人じゃないじゃんて思った。友達が言ってくれた言葉だけど、やっぱり、産んでくれた親が日本で、育ててくれた親がアルゼンチン。どっちも自分。で、自分としては、どちらもよく知らない。アルゼンチンに行くと、向こうでは、現地の人と付き合い中で、なんかちょっと、違うんじゃないか、ってところもあるんです。やっぱり、育てた親は日本人ですから。でも育った環境はアルゼンチンですから、日本に来るとまた逆です。「あれ、私、日本人じゃない。」向こうにいた時には、自分は日本人だって言ってました。でも、日本に来たら、わかんなくなっちゃった。

そして、自分の中で両方の文化があって、その中で一番良かったことは、自分で選択できたんで

すね。文化のこういうところは OK、これはいらぬとか。でも二つの顔を持ってないので、よく自分が日本人なのか“なに人”なのかかわからないって、日系人で悩む人は多いんですよ。自分は一人の人間だって思うしかないと思いました。どっちからどっちまで日本人、どっちからどっちまでアルゼンチン人とか、生まれはボリビアだし、でもボリビアは知らない。

子どもに「いつまで外国人？」って聞かれたことあるんです。でもやっぱり自分が、向こうの料理食べたくないとか、向こうの音楽聞いて「あっ、この音楽！」って思わなくなったら、もう日本人になってるかもしれないって思ったけど、なれないんですね。とりあえず今は、あんまり聞かれなくても、「なに人？」って聞かれたら、「変な日本人だけど日本人です。」

自分で過去は変えられないけど、未来は自分で選択していくことが多いので、自分がここを選んだのも、日本のいいところがいっぱいあるからここがいいと思って暮らしているし、ただどっちかと仲良くできるかというところでもない。日本人の友達いて南米人の友達いて、でもそこを混ぜることはできない。みんな一緒に両方の友達を混ぜてやってみたい、とたまに思うんですね。ここもいい人だし。でも、そこに見えない壁があります。全部全部共感できない。でも変な日本人です。

6. 外国人が、または外国につながる子どもたちが孤立しないためには、なにが必要だと思いますか。

今はどの家もインターネットで自分の国の番組を見ます。全部見られるんですね。それは、悪いことではないと思うけど、そういう家庭も少なくない。多いんです。家の中に入ると料理もそうだし、食事は全部国の料理。小学校で給食食べる時、お箸使うのがとっても下手な子もいますが、

日本人も下手だってよく言われます。お箸で大豆を移す勝負をして、うちの子負けたけど、「フォークだったら勝ってたよ。」って言う。やっぱり家に帰るとフォークとナイフ使うでしょ。食文化も違うし、親の言葉も向こうの言葉になるんですね。

子どもが置かれている状況は、家を出ると日本にいたんだけど、帰るとペルーやブラジルやアルゼンチンになってる。なので、日本のニュースを見ていない家庭もあります。「ガソリンの値段は上がるって知ってた?」「明日だよ。」とか。「だってそういうのは、2週間前に言ってたでしょ。」って自分は思うけど、誰からか聞いた話。自分で直接、テレビや新聞見てからわかることじゃなくて、耳に入った話なんですね。ほんとに孤立している家族で、子どもは家出たら日本語、家帰ったら、スペイン語、ポルトガル語とか。親は日本語しゃべれないから、子どもに色々通訳してもらいのね、いろんなところで。

私の友人も親がスペイン語しか話せない、日本語ちょっと話すけど。やっぱり、子どもが通訳してた。ある時このお母さんがうちの子に、日本語がとっても上手だ、完璧にしゃべってるって言ってた。でも、私から見たら、文法の間違いがあつたり、言葉は子どもだからしょうがないけど知らない言葉があつても。でも、文法は間違ってる。「何々は」じゃなくて「何々が」。「が」と「は」の使い方が間違つたり。それを学校の先生方が気付いてくれないと、家ではだれも気付かないです。言葉の数は、たぶん成長していく中で増えてくるんだけど、話し方とかは、家では親に聞くと、自分の子は日本語上手というコメントが多いです。で、私もそんなに日本語できないけど、聞いてて違うちょっとおかしい、言ってることちょっと反対になっているとか。

自分も親が向こうに行った時に自分たちが外国人。でも、向こうの良かった点は、アルゼンチ

ンとか南米の国は移民が多いんですね。アルゼンチンはイタリア系、スペイン系が多くて、でも、いろんな国の人がいる。イスラエル、ドイツ。自分の同級生の中でもみんなのおじいちゃん、おばあちゃん、どこかの国の人。中でも日本人も珍しくない。「なに人」がいてもみんなふつう。日本にいと、特に私みたいな日本人の顔した外国人は、ちょっと理解できないですね。「何で、外国人?」って言われたことがある。「何で、日本語できないの?」とか。自分が来たときは、切符買うところにローマ字で書いてなかったから、誰かに聞いて「なになに駅まで行きたいんですけど教えてください。」って聞いたら、「なんで教えるんだよ、私が!」すごい怒られて。そしたら、あっそうだ、日本人だと思われてる。「私は外国で育ったんで日本語わかりません。ちょっと教えてください。」そしたら、教えてくれたんですね。でもやっぱり子どもたちも外国人は外国人の顔しているから。金髪とか、色が違うとかじゃないと、外国人じゃないというのがちょっと大変でした。

私の親も向こうで外国人だから、日本人同士で集まって日本料理を作って、いろんな情報を交換してたんです。私は今、日本に来て、その逆やっています。南米から来た人たちと集まって、「高校入るにはこういうところあるんだよ。ああいうところあるんだよ。聞いた?聞いた?」みたいな。それをお母さんたちと集まってお話したり。自分が住んでる地域は外国人が多いからできることなんですけど、そうじゃないところは、ほんと、大変だと思います。共感できる人もいないと難しいです。たとえば、今日みたいなこういう集まりを企画したり、いろんなイベントとかやってほしいんです。やっぱり家族だけで孤立してる人たちいれば、少しずつ出ていく機会作ってあげないと、もっともっと離れていっちゃう。

生活には困らないから外に助けを求めるのは難しいんですね。自分はインターネットで自分の

国のことはわかっているし、つながってると思っているけど、一方、自分が住んでいる地域ではつながりがないんです。そうなるとホント大変ですね。いま日本はすごい豊かな国ですよ。なので、私は思ったんです。この日本で、みんな日本人であっても外国人であっても個性があって、人は“なに人”でも年寄りでも若い人でも、障害があっても、外国人にとっては言葉と文化が障害だったり。でも、こういう企画して、こんないっぱい

集まっていたいて、ほんとにできるんじゃないかと思うんですね。

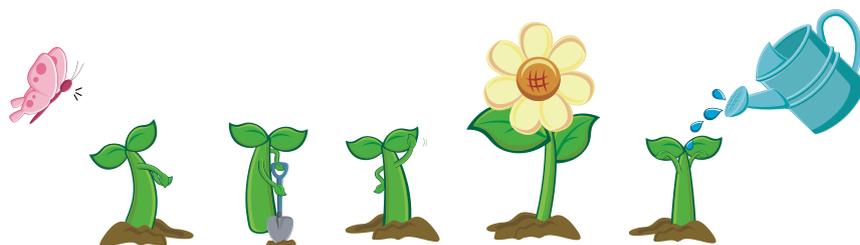
社会が誰にとってもバリアフリーになることは可能ではないかなと思っています。でもそれは、一人ひとりの力がある。今日は、ホントに、ただのおばさんの話を聞いていただいてとっても感謝しています。

【司会】

ありがとうございました。外国につながる子どもたちを理解するためには、家族を知ることも大切です。そのことが、子どもたちを知る入口になります。祖慶さんのお話から、子どもたちの置かれている状況が、少しだけでも理解できたのではないのでしょうか。

このお話を念頭に、第2部のパネルディスカッションにつなげていきたいと思います。

祖慶さんは、日本語が心配とおっしゃっていましたが、今日のために一生懸命準備をしてくださいました。祖慶さんに大きな拍手をお願いいたします。大変貴重なお話をありがとうございました。



●パネルディスカッション

『子どもたちの未来を、ともに描こう』

<パネリスト>

祖慶メルセデスさん（ボリビア生まれ、アルゼンチン育ち、日本在住 21 年）

根本ケイコさん（ブラジル国籍、川和小・川和中卒業、白山高校 1 年）

田崎ひとみさん（外国人支援ボランティア ネットワーク 1・2・3 代表）

大原さかゑさん（横浜市立川和東小学校 国際教室担当教諭）

<コーディネーター>

林田育美（つづきMYプラザ館長）

【司会】

それではこれより第 2 部のパネルディスカッションを始めます。第 2 部では外国から日本に来て子育て中の母親自身、外国につながる子ども自身、その子どもたちを支えるボランティア、子どもたちが通う公立小学校の先生に、それぞれのお立場からお話いただき、子どもたちの未来をともに描いていきたいと思えます。後半は、参加者の皆様からの質問、意見をいただきながら、理解を深めていきたいと思えますので、よろしくお願いいたします。

それではパネリストを紹介します。

祖慶メルセデスさんです。さきほどお話いただきました。保護者の立場でお話していただきます。

根本ケイコさん。小学校 4 年生のときにブラジルより来日。川和小学校、川和中学校を卒業して、現在白山高校国際教養コースの 1 年生です。

田崎ひとみさん。約 20 年間の海外生活で二人のお子さんの子育てを経験されました。帰国後、外国人への日本語サポートや日本の学校に通っている外国につながる子どもたちの日本語教育、教科補習の必要性を痛感し、ネットワーク 1・2・3 を立ち上げました。お手元に「わたしたちができること」と書かれたグループのリーフレットをお配りいたしました。外国につながる子どもたちの日本語支援と教科補習のための KANJI クラブを、毎週土曜日に開いております。

大原さかゑさん。横浜市立川和東小学校に赴任されて、今年で 5 年目を迎えられました。昨年度より、国際教室を担当されています。

コーディネーターはつづき MY プラザ館長の林田がいたします。

それではよろしくお願いいたします。

【コーディネーター】

それではこれから第2部に移ります。

本日のテーマである、「子どもたちの未来を、ともに描こう」ということで、いろいろな立場の方、いろいろな役割を担っていらっしゃる方々のお話を聞きながら、今日ご参加下さいました皆さんと共に意見交換ができればと思っています。

それでは最初に都筑区内で唯一の国際教室がある川和東小学校で、国際教室を担当されている、大原さかゑさんをお願いしたいと思います。横浜市の国際教室とはどういったものなのかも含め、日頃の子どもたちの様子をお聞かせください。よろしく願いいたします。

【大原】

ただ今ご紹介頂きました川和東小学校で国際教室を担当しております、大原と申します。よろしく申し上げます。まだ国際教室を担当して2年目で、それ以前は普通クラスの担任をしておりました。担当になって初めてわかったことが、山のようにありました。今もわからないことや、知らなくてはいけないこともあって、わかっていないことがたくさんあるんだということを今日も感じつつ、参加させていただいております。先ほど配布させていただいた資料の中のホッチキス止めされているものが、横浜市の支援体制についての資料（*資料①②③）でございます。

まず一番ですが、今年度外国籍及び外国につながる児童・生徒がどれぐらいかということがデータとして載っております。今年度は6,465名（平成24年5月1日現在）。見ていただいておりますが、年々増えているということでございます。そのうち、日本語指導が必要な児童、生徒が1,188名ということで、その児童、生徒のために、国際教室がございます。国際教室のことにつきましては、その下にありますが、日本語初期指導が必要な外国籍児童・生徒が5名以上いる場合、教員が一人加配となり設置されます。今年

度は小学校44校、中学校20校に反映されております。合計64校で、下に学校名が記載されております。毎年同じ学校がございますし、新たに今年度立ち上がったという学校もございます。横浜市では日本に来たばかり、或いは帰ってきたばかりで、日本語がわからないということに対して、次のような支援をしております。

まず、裏面をご覧くださいとわかりますが、日本語教室というのがございます。中学生だと、通えるおさんは通っていただけますし、小学生だと日本語教室の先生が学校へ来てくださって、週一回2時間の授業をその子と一緒にするというのもございます。それと、4番にあります母語を用いたボランティア支援というものがございます。これは、来たばかりで分からないことだらけという状態のときにも大丈夫なように支援をするシステムと、それから、その後学習をする上で必要な支援をしていくという二通りのパターンがあります。あとは保護者との連絡が上手くいくようにということで、学校通訳ボランティアというものもあります。またインターネット等でいろいろな資料を紹介しておりますが、2枚目に図になっておりますので、ご覧になっていただければと思います。こちらのラウンジのように外部機関と連絡を取り合ったりすることもございますし、地域の方ともいろいろと相談しながらやっていくということもございます。委員会の方からサポートしてもらうこともございます。



大原さかゑ先生

本校は、都筑区で唯一の国際教室がある学校です。先ほどお話ししましたように、日本語の指導

が必要な外国籍の子どもが5名いませんと、国際教室が設置されません。本校は今年7名の在籍児童がおり、子どもたちが学校生活に馴染んで学習が高めていけるようにというサポートをしています。昨年度は、来たばかりで一年生に入学したお子様がいましたので、先ほどお話した日本語教室と母語を用いたボランティアの先生に来ていただいて、学校生活に馴染んでいくようにということで進めてまいりました。

一番最初にしたことは、避難訓練のことです。訓練のときに母語支援の先生に、これは何のためにやるかということや、なぜ防災ずきんをかぶるかとか、今日の訓練は火事だからとか、そういうことを説明してもらいました。また、みんなと同じようにハンカチを口に当てて、みんなと一緒に外に避難するんだということも説明してもらいました。一年生の教室に行って一緒に話をし、担任の先生が本番ではなくて前日に練習をやったときに、ちょうど（母語支援の先生に）来てもらったので、そのときにこういうことでやるんですよということを説明して、練習のときも、避難訓練本番のときも、安心して参加できたのでよかったなと思っています。やっぱり安全に関わることというのが、まず理解してもらわなければならない、大事なことだと考えています。

日常会話は大丈夫というお子様が多いのですが、教科の中に出てくる学習用語が、算数とか社会、理科とか、普段の生活の中ではあまり出てこない言葉が問題を解くためのキーワードだったりするので、それが理解できないがために、どうしたらよいか分からないというようなことが多々あります。そういう点に特に気を付けながらサポートをしています。本人が、何が一番わからなくて困っているのかということ聞きながら、それについて事前に調べたものを渡したり、それから同じことを繰り返して練習できるようにして進めています。ただ、一人につき週3時間くらいしか取れないので、全部にわたってすべて

をやるというわけにはいきません。担任と連絡を取り合いながら、このときはこうしてほしいとか、この期間はこの人はこれをやってね、というやりとりをしながら進めています。

それからやはり、母国や母語を大切にしてほしいと私たちのほうでは思っています。滞在期間が長くなればなるほど、子どもたちの日本語の上達はとても早いのですが、それにつれて、お家の方とあまりお話ができなくなってしまうとか、日本の方が楽しいと思ってしまう子どももいます。そうではなくて、やっぱり自分がつながっている国、言葉を大事にして欲しいと思っていますので、今年度の取り組みとして自分のつながりある国について知っていることを友達に伝えようということから始めて、「調べてみよう、それを皆に伝えよう」ということを活動の一つとして取り組んでいます。ただ、なかなか子どもによっては、「あまりそれはやりたくないな。」という考えを伝えてきます。でもそれは大事なことから、子どもの気持ちを尊重しながら進めているところです。

子どもというのは、学校だけでなく、保護者とともに地域の一員として生活しています。学校でできることをできるだけサポートしようと思っていますけれども、それだけでは十分ではない。先ほどお話があった地域防災訓練ですね。子どもたちはいろいろな単語を勉強するときに、火事という言葉結構早く教えるのですが、緊急時に「火事だ！」って言われて、何の事だかわからないと困ります。言葉の学習をするときには実物を示すと伝えやすいのですが、「火事というのは絵で見て火事ってわかるかな？」というような絵だったりするんですね。実際に見てもらうわけにはいかないの、「これは火事、火が出て逃げるといこの言葉を実際に聞いたら、逃げるんだよ。」ということ単語の一つとして教えています。そういうようなことは地域でも当然あると思うんですね。3.11のあと、大地震が本当に起きるかも

しれない。そのとき、どこに避難するんだろう。何があればいいんだろうということは、私も含めて皆さんもちょっと心配、大丈夫かなと思うようなところもあると思います。そのときに、言葉がわからなければどうしてよいかわからないだろうと思います。地域全体で大人も子どもも一緒にサポートできるような体制が取れていけたらよいのではないかと考えています。それが子どもたちの、これからの生きる力につながっていくと思っています。私の力はほんの少しではありますが、ぜひ、子どもたちに役立てることができるのであれば、いろいろなことを試みたいと思っています。ありがとうございます。

【コーディネーター】

学校だけではなく地域の力が必要である。それが、つながることが子どもたちの生きる力につながるという先生のメッセージでした。

では次に、今日初めて大勢の人の前で自分の思いを語ろうと決めてくれた根本ケイコさんです。最初にお話しましたように、4年生のときにブラジルから来ました。今高校一年生ですが、これまでにいろいろなことが自分の中にありました。質問に答える形で進めていきたいと思っていますのでよろしく願いいたします。まず日本に来た時に困ったこと、学校で困ったことを話して頂けますか？

【根本】

やはり言葉がわからないというのは、すごくつらかったです。私の両親の場合ですと、両方とも日本語はしゃべれないので、誰がサポートしているのがよくわからなかったです。4年生のときはすごく悩んでいた時期で、違う国から日本に来るのはすごく自分の中でもショックを受けて、言葉もしゃべれないから思いが伝わらないことがすごく困っていたことです。

【コーディネーター】

やはり言葉が伝わらない、自分の思うことが相手に伝わらないということは、すごくしんどかったというか、授業も難しかったと思うのですが、そのときに学校の中では先生と何かやりとりをしたのですか？ どうやって毎日を送っていたのかを教えてください。

【根本】

4年生のときの担任の先生はポルトガル語の辞書を持っていて、それを使って会話してたんですけど、来た時が5年生になるちょうど前で、担任の先生が変わった時に、辞書は使わず、いきなり言葉になりはじめて、そこからすごく学校に行きづらくなりました。でもそこから日常会話はどんどんできるようになっていったんですけど、やはり授業の中では、もう何を言っているかが全くわからなくて。先生にすごく頼ってしまっていたという反省もあるし、自分の中では「もう少しやらなきゃ。」ということに全く気付いていなくて、会話ができたならこれでいいかなと思ってた部分がダメだったと思っています。

先生も外国人の生徒への接し方がよくわかっていない気がして、特別扱いというようなことをすごく感じていました。「みんなと違うんだな。」という思いもあったんですけど、そこから頑張ろうとは思いました。

【コーディネーター】

お友だちとの関係はどうでしたか？

【根本】

まったくしゃべらないような感じでした。

【コーディネーター】

なかなか仲良しの友だちもできなかった？

【根本】

自分の学校には、同じような外国人はいなかった

たので、学校に行きづらかったです。

【コーディネーター】

そういう状況でも、家族の中ではケイコさんが一番日本語ができるようになっていったと思います。日本語が話せない両親の力にもならないといけなかったし。それについてはどうですか？

【根本】

私は小学校4年生の弟がいるんですけど、弟も自分の4年生の頃と一緒にです。弟は自分が日本人と思っているかもしれないですけど、家に帰ると全く違う生活で、そこは区別ができていなくて。そこは自分が教えないといけないなど、最近思っています。

弟に日本ではこうやるけど、家ではこうやらないということをしっかり伝えないといけないし、両親のためにも、毎回できる限り通訳して、両親にも日本ではこういうふうにするんだよ、ということ伝えるようにしています。

【コーディネーター】

小学校4年生のときに来て、すぐに5年生になったわけですね。学年が上がって行って、小学校と比べて中学校に入ると勉強もまったく違うし、すごく変わりますよね？中学生になってからはどうでしたか？

【根本】

中学校に入ってから正直受験というのは全然わかっていなくて。こちらで通訳さんがいろいろと説明してくれたんですけど、自分の中では2年からの成績から受験に入るから、一年間遊ばばいいやと思って、ずーっとやっていました。でも2年になって、遊ぶことから勉強しようという切り替えがまったくできなくて、後期の成績から受験につながるようになるんですけど、後期の成績があまりにもひどくて。そこから自分の日本語がどれだけ不自由なのか、どれだけわかっていないの

かってしっかりわかったし、自分の将来にかかわるんだから、これからしっかり向き合って、しっかりこれから頑張ろうと思ったのも中学に入ってから大きな第一歩だったと思います。

【コーディネーター】

中3になるときに、頑張ろうと思えるようになったきっかけはありますか？

【根本】

やはり MY プラザで、KANJI クラブで田崎さんとか園田さんから、「これから高校に入るにあたって、自分の将来にもかかわるから自分で気づいてこれから勉強してね。」と言ってもらっていたのに、2年生の終わりころになってやっと「やんなきゃ。」と思って。そこから、KANJI クラブのボランティアさん、先生たちに学校の勉強を手伝ってもらえたりして、「これからがんばろう！これから受験で合格しよう！」と思うきっかけになりました。



根本ケイコさん

【コーディネーター】

そうすると、誰かが周りにいたということかな。

【根本】

そうですね。誰かが周りにいて、サポートしてくれる人がいたんだということに気づきました。

【コーディネーター】

それがケイコさんの大きな力になって、受験生になれたということでしょうか。

【根本】

そうです。

【コーディネーター】

本当に中学 3 年生のときには、別人のように頑張っていたと私は思います。周りに助けってくれる人たちもいたけど、やっぱり最後は自分の力で切り開いたんだと思います。KANJI クラブにはあなたを追いかけている後輩もいます。後輩たちに言いたいことはありますか？

【根本】

私と同じように切り替えができていない人とかたくさんいたりして、田崎さんとかすごく悩んでいるのに、本人が気づいていなかったりするんですよ。自分ができていないというのを本人が気づいてなくて。やっと高校に入った自分としては、「ちゃんとやりなよ。」って言いたいんですけど、私も同じ立場だったから、なんとも言えないような、でもやってほしいような、という感じです。ちょっとしっかり周りを見てほしいなという思いがあります。

【コーディネーター】

では最後に学校の先生に伝えたいことはありますか？

【根本】

やはり外国人の生徒にどういう接し方をすればいいのか、どういう程度までが本人のためになるのかというのをしっかりそこを見てほしいと思います。

【コーディネーター】

ではもう一つだけ。将来の夢を教えてください。

【根本】

通訳になりたいです。通訳になって、私と同じような言葉がわからない人たちのために役に立ちたいなと思っています。

【コーディネーター】

ありがとうございました。では、田崎さんをお願いしたいと思います。ケイコさんをはじめ、これまでも多くの子どもたちを支えてくださいました。活動を通したお話をお願いしたいと思います。

【田崎】

ケイコさんのコメントでは、過大評価され過ぎているなと思いますが、私は来年でこのような活動をはじめて 10 年になります。最初はひとりから。ブラジルからきた小学校 3 年生の女の子を見ることから始めて、他にもいるのかと目を転じていたときに、周りに何人もいたものですから、私一人ではどうにもならないということで、仲間を募って今に至っています。

そういう経験と、先ほど紹介のときにありましたが、自分自身も子ども二人をブラジルで育てました。先ほどの祖慶さんとは全く逆バージョンで、向こうの学校で、たとえば幼稚園に入るとき、一年間に使う教材を、2 月の入学の段階で全部買い揃えて持っていくんですね。それはすごい量です。色紙何枚、なんとかは何枚、クレヨンは何セット、色鉛筆をいくつ、もう数えきれないくらいのを紙袋にいっぱい。それを今年度のうちの子どもの分ですと渡しに行くんですね。ある意味では文化ショックで、日本では考えられない、自分が経験したことがないという意味では同じような経験をしてきました。

10 年前に帰ってきて周りを見回した時に、自分が経験したのと同じことを、逆バージョンで感じている方が、子どもたち、親御さんたちなどたくさんいらっしゃるということに気がついたというのが活動のきっかけです。たぶん祖慶さんもそうだったと思うんですが、その中で、時間的なこともありますので、3 つだけお話しさせていただきます。

一つ目は、先ほどのケイコさんの話の中でも出ましたけれども、子どもは、学校に行っている子どもを対象に考えますと、1対39なんですね。これは当然のことなんです、ところが学校の担任の先生って、一人です。一人で39+1を見なければいけない。この子が日本語がわかればよしとしよう。

この子が日本語がわからない場合は、大原先生のところにお世話になるわけですね。最初から特異な存在、わからない存在として扱われるので、問題が表に出がちです。でも、日本で生まれた子どもとか、生まれて一歳二歳のときに来た子どもとかは保育園に行っていたりするから、日本語はぺらぺらです。ですが、先ほど同じような話しができましたが、家に帰れば母国語で話しをしています。親は当然日本の学校は知りません。それとこちらのパンフレットに書いてあるんですが、母国と学校つまり日本文化との間を毎日往復しているわけですね。すると何か家庭で判断しないといけないことが生じたときに、判断する基準は母国の基準で判断されますね。という、トンチンカンなことになるんです。それのとばっちりを受けるのは子どもです。これを解消するにはどうしたらよいかという、できるだけ、きめの細かい指導といいますか、先生方とのコンタクトが必要かなと思います。

望むべくは担任の先生を一人じゃなくして、もう一人副担任の先生を入れていただければ、二人、三人でそのクラスを見ていただける。比較的この問題は解決するのではないかなと思うのですが、できるかどうかは別問題として一つの提言ですね。他とは違うというのは子どもが一番よく知っていると思います。ただし、何にもできないのかという、これはまた違います。「違うんだ」ということを認識してもらわないといけないのですが、「外国から来た子だから何もできないんだ」というのはまったく違って、子どもができる、ぎりぎりのところまでは追い込んでいいはずな

んですね。

日本人はとても親切ですから、何でもやってあげちゃうんですね。これもできないでしょ？あれもできないでしょ？というのではなくて、子どもができるところまで待ってもよいと思うんですね。そういう見極めをどこでつけるかというのは、多分に先生方の経験が必要ではないかと思いません。



田崎ひとみさん

もう一点は、先ほどとちょっと関連するのですが、私も10年子どもを見てきて、子どもは「外国から来て日本語がわからないんだ、かわいそうだよな。」ってよく言われます。でもその「かわいそう」からは何も生まれません。とにかく「かわいそう、かわいそう」なんです、それを子どもに伝えたところで、子どもは「僕ってかわいそうな子？」って言うておしまいです。そうではなくて、そこからスタートしないといけないんです。そこから先、だったらあなたはどうしなければいけないのか。他とは違うんだ。かわいそうだというのはちょっと違いますけれども、それを大人が、周りが言うことによって、本人がそう思いこんじゃうというのは、その子にとってマイナスになりますね。決してプラスのことは生まれてこないです。同情するならなんとかをくれという話がありましたけど、比較的近いかなという気がするんです。私は同情するなら理解をくれと言いたいんです。

相手を理解するためには、相手のことを知ろうとしないといけないです。知るところから始まっ

て、やっぱりこの子とはこうしよう。この子の母国はこうなんだから、といういろいろなそれ以外のことを考えてくれるのですが、まず知ろうとしないことが大きなバリアーだと。知ろうとしない、積極的に知ろうとしないとは言いません。ただ、抜かしていることはそれに準ずる罪だと私は思っています。周りにそういう子どもがいたら、積極的に知ろうとして頂きたい。そのことによってわかることが随分たくさんあると思います。大人と比べて子どもは発信力が弱いですから、周りの大人が見てあげないといけないと私は思っています。

もう一点はそういう子どもたちが日本社会で、何を私たちが目標にしてあげていったらよいかと思うと、一番足りないのは、ご両親が与えられるべき情報が子どもにプラスになっていない。ご両親は、母国での生きるための方策はいろいろとご存じですね。こうなったら、こうなるということもおわかりです。だけど、それは、そういう情報は日本では生きてこないんですね。

ケイコさんはご両親が外国の方で、日本語がお上手でないということになると、日本語での情報というのは入ってきていませんから、彼女が中学から先どうなるのか、全くわからない状況だったんです。そういうときに中学から高校に行く。高校にいったら、高校の中でもいろいろな種類があって、どこを選んだらよいか。それを今悩んでいる子もいます。そこを出たらどうなるのか。たとえば、普通科の高校を出たら、その先どうなるのか。工業科を出たらどうなるのか。商業科を出たらどうするのか。あるいは高校に行かなかつたらどうなるのか。日本人だったら調べればわかること、あるいは自分の経験値で知っているということが、親御さんからは伝えられない。そうすると、我々の経験もそう多くはないですが、こうだよ、こうなればこうなるんだよ、っていうことを子どもたちに伝えることはできるかなって私たちは思っています。そのときに、こうすれば

いいんだよ、ではなくて、やはりその子が抱えている文化というのを理解しながら、違いを説明することはもちろん必要になります。

多様で特に難しいなと思っているのはイスラムの子どもさんたちですね。日本人のクラスメイトとは全く違う行動様式を求められている。特に高学年になると、一人前のイスラムとしての教養を必要とされるので、今まさに、先週の土曜日からラマダンに入りましたけれども、それを実践している子どももいます。そういうこともこちらで理解してあげないといけない。それを知ったうえで、じゃあ体育の時間どうするの？とか給食の時間どうしているの？とかそういうこともちょっと聞いてあげると、子どもは自分を理解してくれようとしていると、私は勝手にですが、そう思っているんですね。そうすると、自分はどうしているよということが出てくる。そういうコミュニケーションというんですか、そういうのも十分とることが、少なくとも子どもの力になれるかなというふうに思いながら、日々やっております。以上です。

【コーディネーター】

祖慶さんにはいろいろとお話をして頂きましたが、一つだけ、お母さんの立場での質問をさせていただいてもよろしいでしょうか。お子さんが3人いらして、祖慶さんはご自身の文化とは違うところで子育てをして、子どもたちは日本人に近い人間になっているんじゃないかと思います。彼らはそれぞれにこれから伸びていくわけですが、日本で子どもたちが生きていく中で、母としてどう支えてやりたいか。文化の違う国で、母としてどう子どもたちを支えていこうと思っていらっしゃるか。いかがでしょうか。

【祖慶】

そこは私にとって難しいです。日本社会の中の“上下関係”を受け入れられないものがあって、子どもがここで社会人になると、その道に行くん

ですね。どのようにさせていいかは本当にわからないです。



祖慶メルセデスさん

【コーディネーター】

4人の方のお話を聞いて思うのは、一人の力は非常に小さいけれど、立場の違ういろいろな人が集まれば、子どもを支える大きな力になるということ。そして支える方法はいろいろあるけれど、「ここにいるよ。」というメッセージが大切なのだと思います。

さっきケイコさんが、周りをみたらたくさん人がいたと言っていました。きっと近くにいることが大人の役割なのかもしれません。「ここにいるよ。」という言葉ではないメッセージをどうやって子どもに届けるのか。それを考えるのは大人の役割であり、子どもの生きる力につながるのではないかと。そして大人はどういうメッセージを出し続けなければならないのか。これを考え続けることが今後必要なのだと思います。

せっかくこれだけ多くの方がご参加なので、この方に質問してみたいとか、たとえばここまでの話を聞いて、感想を言いたい方はいらっしゃいませんか？遠慮なく。パネリストの方とのやりとりができればと思っています。感想でも。名指ししていただいても結構ですが、いかがでしょうか。

【質問者1】

泉区のいちょう団地で外国人の学習支援をしています。祖慶さんにお伺いしたいのですが、お

子さんが3人いらっしゃるということですが、子どもの将来について南米とのつながりであるとか、スペイン語を保持するとか、そのあたりをどう考えていらっしゃるのでしょうか？

田崎さんにお伺いしたいのですが、今年から高校受験が変わって、前・後期一つになりますよね？外国籍の方の対応はどう考えておられますか？

【祖慶】

「保持」ということが分からないのですが。私の子どもたちはスペイン語を話せません。というのは、私も本当は帰りたかったんです。帰るには、せっかくだから日本語を覚えてから帰ろうと思っていた。でも途中でいろいろな事情があって帰れなくなって。でもこれから（子どもに）スペイン語教えようと思ったら、自分が切り替えられない。家の中でスペイン語をしゃべっても、どこかで日本語になってしまう。そこだけは、損した気持ちです。

でも子どもたちには、やっぱり何が違うのか、言葉では言えない部分があるので、一回だけ、下の子はまだですけど、上の子二人は、アルゼンチンに行っています。一か月ちょっと向こうにいて、そこで本人たちも違うんだってわかってくれたと思います。日本で生まれて育って、日本にずっといて、親がつながっている国に行けない子どもたちは、本当にとっても複雑だと思います。

【田崎】

おっしゃるように、今年度から受験の形が変わるのですが、今年度は一人だけなんです、受験する子が。去年はケイコさんを含めて三人おりました。なので、こちらとしても、今はまだ手探り状態です。公立高校を受けられるかどうかのレベルですので、学校選択とかそういうところまで行っておりません。でも頑張るように言うしかないのです。

【質問者2】

こちらの林田さんと一緒に横浜市の思春期問題を検討させていただいている岩室といいます。仕事としては医者なのですが公衆衛生的なことを主にやっております。私自身、小学校6年間、アフリカのケニアに日本人一人で放り込まれたという中で暮らしていました。今話を伺って一つ感じたのは、日本社会はどうも人を孤立させて違いを受け入れないところがあるのかなど。これは外国籍だけではなくて、日本人同士でも今そういう状況にあるのかなど。同時に、知ろうとしない、無関心でいる社会があると、それに対してどう関わればよいのかというの、思春期問題を考えるときには全く同じ壁にぶち当たっているということ、改めて教えていただけて、すごく勉強になりました。

一方で、違いを認めるということで、大原先生にお聞きしたいのですが、私自身アフリカのケニアにいたときに、日本っていいところなんだと思ったのは、実はアメリカ人が柔道をやっていたからなんです。で、「紳也お前も柔道できるんだろう？」って必ず聞かれるんですけど、柔道着も見ただことないですし、黒帯と言われても何だか分からない小学生だったんですね。ですから、外国の方に「母国をよく思いなさい。」というよりも、「ブラジルってすごいよね！」という話をしたほうが、よっぽど「ブラジルってすごいんだ！」って、ブラジルの、例えばケイコさんの心に響くと思うん

ですよね。私自身が日本のよいところって言われてもわからなかったんです。でも外国の方が柔道やっていて、日本はこういうところなんだと知ったんですね。「自分の国を大事にしなさいよ。」と外国籍の子どもに言うより、違いを受け入れない日本人の子どもたちを通して、外国籍の子どもたちをエンパワーする。母国に誇りをもってもらうというやり方。そのあたりは、すごく難しいと思うんですけど、何か考えておられればお願いします。ケイコさんにもお聞きしたいと思います。

【大原】

国際理解委員会という子どもたちの委員会があります。昔と違って、国際理解教室とか英語活動というのがあって、いろいろな国の先生がいらしてくださったりもしているのですが、そういうのを通して、いろいろな国のことを知ろうよという活動は、ほかの子どもたちに対してもあるんですね。

先ほどお話した一年生から来たお子さんはクラスの中では特に孤立することもなく、言葉が話せないときは、コミュニケーションをとるのが大変かなっていうところがあったのですが、すごく友達と仲良く過ごしていて、そこで、自分の知っていることを伝えるということがその子にとって自信になったというか、すごく楽しかったようなんです。なので、それを皆の前で発表できたことがよかったと思います。また今年もやりたい



と本人は言ってくれて、みんなに知らせたり、みんなとつながるといことが楽しいことなんだとわかってほしいし、それを自分で発信して、良いところを知ってもらうことがいいかなと思っているんですね。

ちょっと答えになっていないかもしれないんですが。いろいろと調べる方法もあるので、高学年の子どもたちには、ガイドブックなどを持ってきて「こういうのを知っている？」って聞いても、「知らない。」という答えがあったりしても、後で自分で一生懸命見ていたりするんですね。そういうことをヒントとしてあげると、少しずつでもよいから興味関心を持ってもらって、いいところかっこいいところを見つけられるといいよね？という形で進めているところです。

【根本】

私の中では自分の国がすごく好きで、小さい頃からずっと過ごしていたので、自分の国の良いところは分かっているんですが、先ほど話した通り、弟は小さい頃からずっと日本に住んでいるので、全くブラジルについて知らないですし、ブラジル人だということは、全くわかっていないんですよ。家の中では、「日本ではこうなだけど、ブラジルではこういう形でやるんだよ。」というように、比べると、本人にとっては、「えっ、違うんだ。えっ、面白そう！」って本人はすごく興味を持つし「ブラジルではこういうことをするのか？」ってすごく気にしたりします。本人にとって自分の国の良いところを探すきっかけになると思います。

【質問者3】

神奈川県総合高校で日本語を担当している樋口と申します。地域では、「中学・高校生の日本語支援を考える会」というNPOで国際教室の先生方への研修も文化庁から依頼されてしております。お母様への質問です。お子様たちの高校入試は非常に不安だと思うのですが、その不安が消さ

れたときとか、不安が大きくなったときはどういうときでしたか？それをこれから経験されるお母さんたちに伝えたいので教えてください。

【祖慶】

ケイコさんのお話を聞いても、自分がどういう立場に置かれているのかわからないというのが一番。たぶんそれは、みんな中学校まですらすらと留年もしないで上がっていて、あっ、受験だつてなる。漢字知らなくても留年しないで上がっているし、ずっと不安でした。不安というよりどう対処したらよいかわかりませんでした。とても大変。そこで受験するようになって、高校をどう選ぶのかということになって、私もよく理解できていなかったかもしれない。子どもが一人で背負って、周りの先生に助けてもらったのかなと思います。うちの子は日本で生まれて育っているから、国際教室行ったことないんです。私は本当は行ってほしかった。学校には、いらないうって言われて。日本語はできるけど、日本社会のことを知らないので行ってほしかったです。

【質問者3】

学年が上がっていくときに、外国では留年ということも中学校でもあるのですか？

【祖慶】

小学校からあります。だから、子どもに学力がついたかどうかは学校の判定でわかるけど、日本ではどんどん上がっていくので、自分の子どもがついていっているかどうかかわからなくて、不安だった。

あとは、通知表ですよ。バツはつかないですよ。「どうして、ここバツじゃないの？」って先生に聞いたことある。そしたら、つけられないって。聞いて初めて何のための通知表かと思いましたけど。

【質問者3】

私も子どもたちに10年くらいかかわってきて、子どもたちが自分に自信をもって生きていくためのアイデンティティを確立していく中で、うまくいった例もあると思うんですね。

今まで私がいちょう団地やその他の地域で見聞きしてきた例ですと、2歳のときにラオスから来たのに、「自分の国ではどう？文化は？食べ物はない？」って聞かれたときに2歳ではわからない。あなたの国に自信を持って先生に言われたときに、「あなたの国は、ここじゃないよ。」と言われていたみたいだったとその子に言われて、私も涙が出そうになりました。教員からも「自信を持って」とか「どうなの？」って聞かれて、2歳で来て、ましてや日本生まれでわかるはずがないのに、それはちょっと子どもにとって過酷かなと思いました。

それと『子どもメール』注1に入っている方もいるかと思いますが阪大の博士課程の高橋朋子さんという人がまとめていました「見えない子どもたち」。日本生まれだったり、小さい時から来ていると、日本語が不自由していないように見えるけれども、なかなか学力がついていかないとき、その子は日本語がちゃんとできているんだから、学力がつかないのは本人の能力がないみたいに学校や友達に扱われている。けれど、実際はやっぱり日本語の細かい部分の幼児期に入ってくる量、日本語の量が違いますよね。それでなかなか認知能力が高まらないので、残念ながら日本人のようにいかないというケースが多くあって。ラッキーなご家庭もありますが、むしろそうではない家庭の方が多いので、地域でやっていくときには立派な例もあるし、そうでない例もあるということを知っておくことが、私たちが地域で支援していくときには、大切なんじゃないかなと思います。

注1「日本で暮らす子どもたちと大人たちの日本語を考えるメーリングリスト」

【コーディネーター】

日本語ができるというのは、ある意味、表面的なことだろうと思っています。日本語ができるから全てがわかっているわけではなくて、一人ひとり、全部抱えているものが違いますし、家庭環境やら、生い立ちやらすべてが違うので、日本語ができるから大丈夫というのが最も危険なことだと考えています。

【質問者4】

東京の町田市から来ました。丸山と申します。ボランティアで中学生を教えるようになって5年になります。

大原先生に質問ですが、先生の場合、国際教室が学校にありますよね。ところが、国際教室がない学校はたくさんあるはずですよ。そういう学校には、先生を派遣をするわけですね。日本語のクラスがないので、派遣をするということは、だれが派遣をし、どんな人が派遣され、派遣された人は子どもにどう接するのか。どうなっているのかを大原先生に伺いたいのですが。

それから根本さん。高校受験について、2年生からその気になった。その気になって間に合いましたか？

田崎さん、簡単でいいんですけど、中学を卒業してそれで終わったお子さんをたくさんご存じだと思うんです。そのあとどうなっているのかをご存知でしたらお聞かせ願いたいです。

【大原】

先ほどの資料(資料3)の中に表があるんですが、学校に外国籍の子どもが来るということがわかりましたら、学校から委員会に連絡を入れ、その連絡を受けて委員会の方から日本語講師を派遣してもらいます。「日本語教室には、今回この先生が来てくださいます。」という連絡が来て、週一回曜日と時間を決めて、国際教室に、その子に

来てもらい、一対一で対応してもらいます。

【質問者3】

(国際教室の先生方への研修をしているものとして) 補足ですが、派遣される人は教育委員会が毎年試験をやって選んでいます。二か国語を話せる方で、420時間の日本語講座を受けているか、あるいは日本語教育能力試験に受かっているかのどちらかで、一年間の人数が決まっています。まったく日本語ができない子が教室で50分間、人形のように座っているよりは、初期指導として二か国語を話せる人に、日本語講師として対応してもらったほうがいいのではないかと。川崎市の場合もう少し、日本語講師になる方のハードルは低いようです。教育委員会によって日本語講師になる条件は違うようです。

【根本】

正直2年生のときに、あまりにもわからないことが多くて、すごく困っていたのですが、今考えますと、間に合っていると思います。今の自分の成績をみて、あれだけやってよかったなと思っています。

【田崎】

中学校を卒業した子どもの進路ということでしたけど、今まで高校に入れなかった子どもは一人だけです。その子どもさんは、相模原の職業訓練所に行きましたが、その後のつながりは残念ながらありません。

【コーディネーター】

もっとたくさん質問を受けたいところですが、時間が迫って参りましたので、この辺でまとめをしたいと思います。

今回のシンポジウムは、つづき MY プラザが開館して初めての企画です。ここは都筑区における国際交流ラウンジ、外国人支援の拠点でありますが、5年目を迎えてようやく学校や教育委員会、



林田育美館長

地域の方々、ボランティアの皆さんなどいろいろなつながりができ、今日このような会を持つことができました。私は、ここからがスタートだと思っています。

企画にあたって、いろいろな方に来ていただきたいと思いつつも、やはり、皆さん、お忙しい方で、どういう日程設定をすればどういふ方に来ていただけるのだろうと考え続けました。

今回はどうしても学校関係の方々に来ていただきたいと思いついて、この夏休みの時期に設定いたしました。本当でしたら、当事者である外国籍の方々にもっと来ていただきたいと思いついたら、実は、こういう日程の設定をしたために、夏休みを利用して一時帰国というのが続出しまして、そのあたりが、うまくいかなかったところです。また機会がありましたら、次の企画を考えたいと思っています。

私たちがどこかに導けるわけではありませんが、とにかく「つづき MY プラザがここにある。」「私たちがここにいるよ。」というメッセージだけは、子どもたちに出し続けていきたいと思っています。本日はご参加いただき、ありがとうございました。

横浜市における外国籍及び外国につながる児童・生徒教育 (日本語指導が必要な児童・生徒への支援)

H24年6月25日 指導企画課

1 外国籍及び外国につながる児童・生徒教育関係データ

○ 横浜市における外国籍及び外国につながる児童・生徒数(小中学校)

(5月1日現在)

		H21(2009)	H22(2010)	H23(2011)	H24(2012)
外国籍・外国につながる		5,758	5,975	6,257	6,465
外国籍		2,418	2,432	2,315	2,232
国別	中国(台湾を含む)	846	869	824	773
	フィリピン	296	293	306	314
	韓国・朝鮮	423	400	353	309
	ベトナム	241	241	232	231
	ブラジル	172	171	165	161
	ペルー	166	151	136	132
	タイ	34	34	38	37
	カンボジア	27	27	29	25
	その他	213	246	232	250
	外国につながる		3,340	3,543	3,942

※国籍及びつながる国の総数：83カ国

日本語指導が必要	1,278	1,332	1,195	1,188
-----------------	--------------	--------------	--------------	--------------

※日本国籍、帰国子女含む

2 国際教室担当教員配置校

○外国人児童生徒への指導を担当する教員を配置(神奈川県による加配、H4～)

○国際教室を設置し、日本語指導、教科指導、生活適応指導等を行う

★配置期間：1年間

★配置基準：日本語初期指導が必要な外国籍の児童・生徒が

5名以上 → 教員1人加配 / 20名以上 → 教員2人加配

年度	H21(2009)	H22(2010)	H23(2011)	H24(2012)
配置校数	58	59	64	64
小学校	41	40	44	44
中学校	17	19	20	20

★H24設置校(64校)

(小)1名加配:38校、2名加配:6校 (内 新規校:5校)

市場小、入船小、潮田小、駒岡小、汐入小、下野谷小、新鶴見小、末吉小、鶴見小、豊岡小、生麦小、平安小、池上小、東小、宮谷小、本町小、元街小、山元小、石川小、太田小、永田小、中村小、日枝小、南吉田小、野庭すずかけ小、新井小、滝頭小、洋光台第四小、金沢小、富岡小、並木第一小、六浦小、新吉田第二小、十日市場小、川和東小、柏尾小、小雀小、東戸塚小、平戸台小、飯田北小、いちょう小、上飯田小、相沢小、阿久和小

(中)1名加配:15校、2名加配:5校 (内 新規校:2校)

市場中、潮田中、寛政中、鶴見中、矢向中、六角橋中、老松中、富士見中、港中、吉田中、共進中、平楽中、金沢中、並木中、富岡東中、十日市場中、名瀬中、平戸中、舞岡中、上飯田中



3 横浜市日本語教室

- 日本語の初期指導が必要な帰国及び外国人児童生徒に対して、日本語指導資格をもった講師が指導を行う
- 指導体制

【集中教室(児童生徒が通級)】 港教室、豊岡教室、いちよう教室、並木第一教室
月曜～金曜・週2回 計20～60回 (1年間)

【派遣指導(日本語講師を各学校へ派遣)】
月曜日～金曜日・週1回 計20～40回 (1年間)

【日本語講師の対応言語内訳】

H24年度:28名(非常勤講師)

中国語(20) 英語(25) ポルトガル語(5) スペイン語(5) カンボジア語(1)、韓国・朝鮮語(1) イタリア語(1)

★入級者数(1児童生徒につき、1回まで)

年度	H21(2009)	H22(2010)	H23(2011)	H24(2012)
合計	380	376	296	150
集中教室	140	119	98	44
派遣指導	240	257	198	106

※H24/6/25現在

4 母語を用いたボランティア支援

(1) 初期適応支援(生活適応)

- 入学まもない日本語が理解できない児童生徒への母語のできるサポーターによる学校生活適応支援を行う
- 編入後まもない時期に1回につき2時間
- 国際教室設置校(学習支援推進校を除く)は10回、国際教室設置校以外は15回まで

(2) 学習支援

- 児童生徒の母語ができる学習支援サポーターによる学習支援を行う
- 国際教室設置校のうち、教育委員会が委嘱した推進校

★H24推進校(25校)

(小)16校 うち新規校:2校

市場小、入船小、潮田小、汐入小、鶴見小、宮谷小、本町小、元街小、太田小、南吉田小、野庭すずかけ小、並木第一小、新吉田第二小、飯田北小、いちよう小、阿久和小

(中)9校 うち新規校:1校

市場中、鶴見中、老松中、富士見中、港中、吉田中、共進中、富岡東中、上飯田中

5 学校通訳ボランティア(保護者対応)

- 市立小中学校における転入学の説明、個人面談、入学説明会、家庭訪問等における通訳を行う
- ボランティアの派遣は、公益財団法人横浜市国際交流協会(YOKE)に業務委託

★派遣実績(回)

年度	H21(2009)	H22(2010)	H23(2011)	H24(2012)
回数	592	622	650	年度末に集計

6 各種ガイドブック等発行(配布・HP)

《Y・YNET(イントラ)掲載》

※H24～H25改訂予定

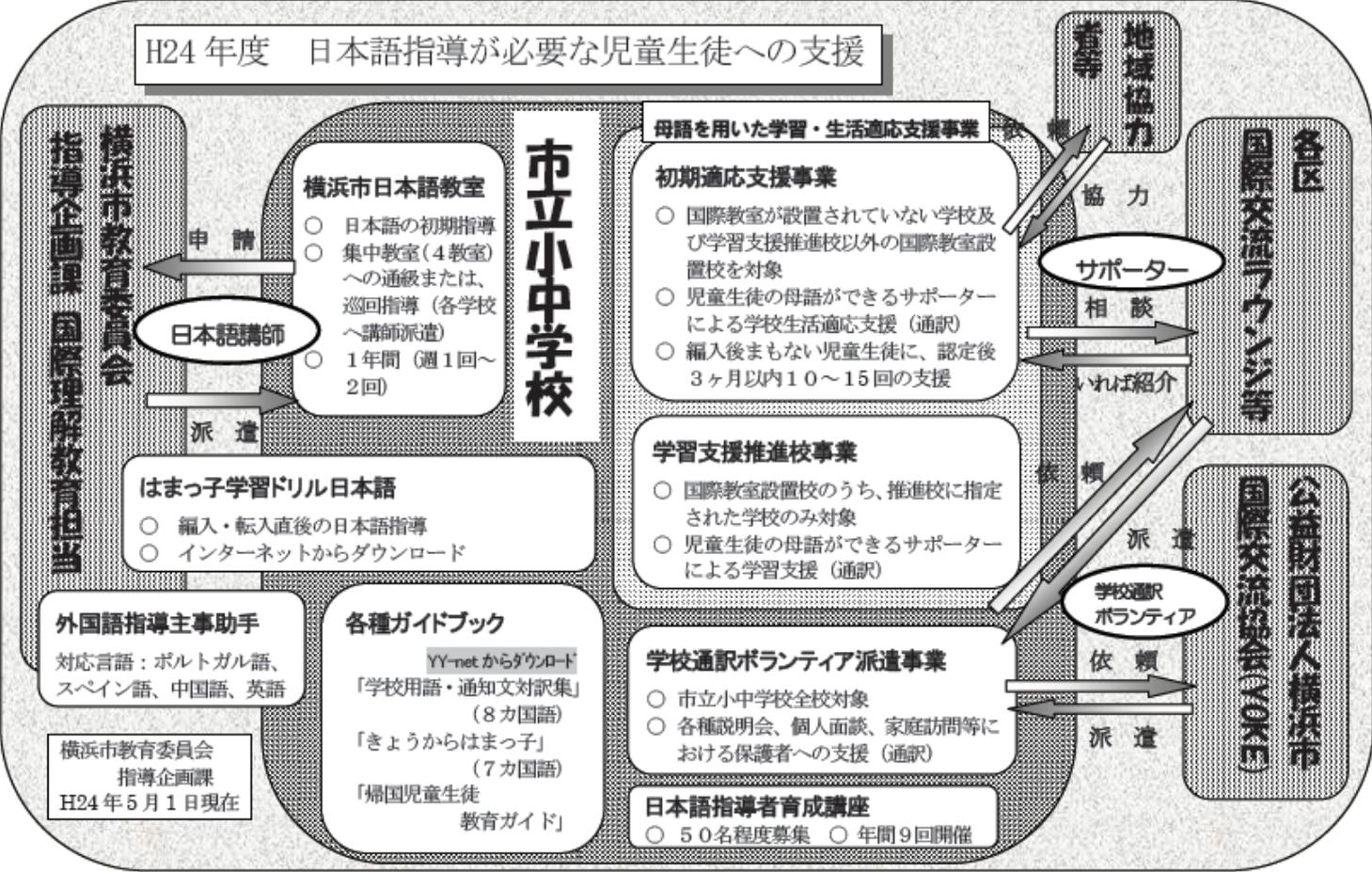
- 「学校用語・通知文対訳集」【H14】 8カ国語(英語、中国語、ハンブルグ、スペイン語、ポルトガル語、タガログ語、ベトナム語、カンボジア語)
- 「きょうからはまっ子」【H12～】 7カ国語(英語、中国語、ポルトガル語、ハンブルグ、タガログ語、スペイン語、ベトナム語)
- 《横浜市教育委員会HP掲載》
- 「横浜市帰国児童生徒教育ガイド」【S56～】

7 日本語指導者養成講座

- 全校対象(10回程度、募集人員50名) *国際教室担当1年目と2年目の教員は悉皆参加
- 日本語指導の仕方、日本語指導が必要な児童・生徒の受入れと指導 他

8 教育委員会事務局 外国語指導主事助手

- 対応言語:ポルトガル語、中国語、英語、スペイン語(計5人)
- 学校管理職から電話で要請
⇒教育委員会事務局 指導部 指導企画課 国際理解教育担当



H24年度版 **日本語指導が必要な児童生徒への支援** 横浜市教育委員会 指導企画課

支援内容	国際教室あり(64校)				国際教室なし		手続き等	
	※日本語指導が必要な外国籍児童生徒の数が5人以上の学校に、担当教員の配置(5名以上・・・1名加配 / 20名以上・・・2名加配)				小学校	中学校	申請方法	謝金等
	母語を用いた学習支援推進校 (25校)		母語を用いた学習支援推進校以外の学校 (39校)					
	小学校	中学校	小学校	中学校				
日本語教室への入級	◎	◎	◎	◎	◎	◎	学校(管理職)から市教委へTELにて入級申請	講師からの「勤務実績報告書」に基づき、市教委が講師の指定口座に振込み(毎月21日)
講師の派遣(巡回指導)	《1・2年》20回 《3~6年》25回	原則: 集中教室への通級(40回)	講師の派遣(巡回指導)	《1・2年》20回 《3~6年》25回	《1・2年》30回 《3~6年》35回	原則: 集中教室への通級(60回)	→市教委から申請書(複写式)を送付 →学校(本人または保護者)は、申請書を記入し市教委へ送付 →市教委は申請書をもとに講師(教室)を決定、連絡	
集中教室への通級	《1・2年》20回 《3~6年》25回 ※集中教室設置校等		集中教室への通級	《1・2年》20回 《3~6年》25回 ※集中教室設置校等	集中教室への通級	《1・2年》40回 《3~6年》60回 ※集中教室設置校等		
母語を用いた学習支援	◎	◎	×	×	×	×	推進校に応募した学校の中から市教委が推進校を委嘱	学校からの「実績報告書」をもとに、市教委が各サポーターの指定口座に振込み(四半期ごと、7・10・1・4月の末日)
※学校が依頼したサポーターによる支援	※学校ごとに異なる回数上限あり ※実施期間H24/4/17~H25/3/8	※学校ごとに異なる回数上限あり ※実施期間H24/4/17~H25/3/8						
母語を用いた初期適応支援	×	×	◎	◎	◎	◎	学校(管理職)から市教委へTELにて申請	学校からの「実績報告書」をもとに、市教委が各サポーターの指定口座に振込み(実績報告提出日の翌末日)
※学校が依頼したサポーターによる支援	※学校の支援は、生活適応支援		◎ H24~対象拡大	◎	◎	◎	学校は「申請書」(学校便利帳→マニュアル・様式→教務(教務)→国際理解関係)を記入し、市教委へ送付	
※編入後まもない児童生徒1人につき、10回まで			※編入後まもない児童生徒1人につき、10回まで	※編入後まもない児童生徒1人につき、10回まで	※編入後まもない児童生徒1人につき、15回まで	※編入後まもない児童生徒1人につき、15回まで	※教育委員会が認定してから3ヶ月以内	※教育委員会が認定してから3ヶ月以内
※実施期間H24/4/9~H25/3/8			※教育委員会が認定してから3ヶ月以内	※教育委員会が認定してから3ヶ月以内	※実施期間H24/4/9~H25/3/8	※実施期間H24/4/9~H25/3/8	※実施期間H24/4/9~H25/3/8	※実施期間H24/4/9~H25/3/8
学校通訳ボランティア	◎	◎	◎	◎	◎	◎	学校から「依頼票」(学校便利帳→マニュアル・様式→教務(教務)→国際理解関係)をYOKEへ提出	学校からの「報告書A」をもとに、YOKEが各サポーターの指定口座に振込み
※YOKEに登録し、YOKEから派遣されるボランティアによる支援								
横浜教育支援隊	【内容】「学校の役に立つことを何かにしてみたい」「自分も持っている技能や経験を子どもたちに伝えたい」という方が、「学校ボランティア」として活動							
※方面別事務所に登録されているボランティアによる支援	【活動】一般ボランティアによる活動(学習活動or学校運営) / 元・教職員による活動							
	【範囲】特定の学校のみならず、複数の学校で活動することを対象							
	【問合せ】各方面別学校教育事務所指導主事室							

発 行 つづきMYプラザ(都筑多文化・青少年交流プラザ)
〒224-0003
横浜市都筑区中川中央 1-25-1 ノースポート・モール 5F
TEL : 045-914-7171 FAX : 045-914-7172
URL : <http://tsuzuki-myplaza.net/>
発行日 平成 24 年 10 月
編 集 つづきMYプラザ(都筑多文化・青少年交流プラザ)



つづきMYプラザ
TSUZUKI MULTICULTURAL & YOUTH PLAZA